

春障子

松岡隆子

探梅の坂を上がつた辺りかな
探梅や階の風昏るるまで
鬼やらひ一人のこゑの身に返り
亡き人の分も数へて年の豆
午後といふ静かな時間春障子
船笛遠し春障子開けてある
遠き橋とほき海見て春ひとり

なかなかに思ひ解れぬ牡丹の芽
いきなりの花葉明りの風にかな
畑隅にホース置きある花葉照
これからのこと沈丁の咲きだして

新しき木札の匂ふ梅 二月

立春の翌日東京は予報通りの雪となった。夜通し降り続いた雪はそれなりに積もったが翌日は好天となり殆ど解けた。庭隅の沈丁花が開き始め牡丹の芽も膨らんできた。牡丹の芽と言えば先生の句に〈風光ること雨中にも牡丹の芽〉がある。自註に「この句の主季語は『牡丹の芽』だが…」とあり、「春の風の眩ゆさは決して快晴の日の現象だけではなく、雨中を吹いてもなお輝くものである」ということが言いたかった」と述べておられる。雨中の牡丹の芽を見ると必ず思い出す一節である。『岡本眸全句集』は目下季語索引の校正中である。刊行はいま暫くお待ちいただきたい。